

未来へつなぐ国立劇場プロジェクト ～新たな国立劇場がめざすもの～

【基本理念】

伝統芸能が人をつなぎ、未来へつながる

文化芸術を創造し享受することに、人々はいつの時代も喜びを見出してきました。日本人にとってそのような文化芸術のひとつが伝統芸能であり、歌舞伎・文楽・能楽・雅楽・組踊などは、人類の文化遺産としても認められています。

伝統芸能を保存、振興するために、昭和41年に国立劇場は開場しました。この劇場で伝統芸能は人から人へ受け継がれ、人と人とをつないできました。実演家は先達から技芸を受け継ぎ、舞台上で披露し、観客はその技芸に心動かされ、ともに声援を送り、スタッフは両者を支えてきました。そうして、国立劇場は伝統芸能を創造し享受する場となってきました。

しかし、この半世紀あまりの間に国内では生活様式が大きく変化し、少子化が進み、多くの人にとって日常の暮らしと伝統芸能の距離は広がっていきました。実演家にとって観客がいなければ、演じることができません。伝統芸能を観たい、聴きたい、感じたいという人が少なくなれば、演じる人、支える人も減り、伝統芸能を未来へつないでいくことが困難になります。新たな国立劇場は、初代国立劇場が築いてきた蓄積を基に、享受する人とともに伝統芸能を創り、未来へつなぐことを目指して、今後の事業を進めます。

新たな国立劇場では、伝統芸能と人との何気ないふれあいや人と人との出会いの場を設けるとともに、客席での鑑賞だけではない新しい鑑賞・体験・参加の

機会を提供します。劇場を飛び出して、様々な機関と連携し、活動の場を広げることも試みます。半蔵門の地であれ、ほかの場所であれ、リアルな施設であれ、バーチャルな空間であれ、多くの人々がじっくりと、あるいは気軽に、伝統芸能に触れる機会をつくります。様々な人々にいろいろな形で受け入れられてこそ、伝統芸能はしなやかで強固なものになると私たちは考えます。

新たな国立劇場が、持続的に発展する伝統芸能を通して、国内外の社会に広く開かれ、多くの人々が集い交流する場となることにより、私たちは地域社会、日本全国、そして世界の人々の多様な幸せの実現に向けて、より一層の貢献を果たしていきます。

【事業の実施プラン】

1 地域環境と調和した魅力あふれる文化観光の拠点として

新たな国立劇場は、民間企業が経営する施設を併設し相乗効果を発揮して、魅力あふれ賑わいのある文化観光の拠点となることを目指します。

皇居の緑につながり四季折々の顔を見せる前庭、スムーズなアプローチ、多機能なオープンスペースを持つ劇場に加えて、レストラン、カフェ、ホテル等が一体となり、多様な文化観光ニーズに対応していきます。

観劇や観光、ビジネス等で訪れた方々、地域の方々など多くの人々が集う開かれた場は、緑豊かな環境と調和し、思い思いの時を過ごせる魅力的なランドマークとなり、周辺地域と連携して賑わいを生み出します。

2 伝統芸能の伝承と創造の拠点として

(1) ふれあいと交流の広場

愛好者だけでなく、これまで伝統芸能に触れた経験のない方や少ない方、例えば、青少年・親子・社会人・外国人・障害者など、多様な人々が伝統芸能を介して出会い、楽しみ、学び、交流することのできる、ふれあいと交流の広場を創設

します。公演のない日でも、食事や喫茶の目的だけでも、あまり時間がないときでも、いつでもだれでも気軽に立ち寄れる空間です。

この広場では、見て・聞いて・触って遊べる体験型・体感型・参加型の展示のほか、調査研究や資料収集の成果を展覧する様々な企画展示を行います。また、図書・資料の閲覧や公演記録映像の視聴等ができるレファレンスサービスを提供するほか、ミニパフォーマンスやコンサート、ライブビューイングなどを開催します。あわせて、ガイド付き劇場ツアーやXRなどのデジタル技術を活用したイベントなども実施します。

地方や外国在住、その他の理由で来場することが難しい人々に向けて、劇場が身近に感じられるとともに、広く伝統芸能を楽しみ、学べるように、バーチャル空間を活用する試みにも積極的に取り組みます。さらには学校教育、社会教育やICT教育でも活用できるコンテンツを充実させ、誰もがいつでもどこでも伝統芸能に触れることができるよう、インターネットによる情報発信を強化します。

劇場の外でも、地方自治体、関係団体、海外との連携協力により、公演やレクチャーデモンストレーション、ワークショップ等を実施し、より多くの人々が伝統芸能を身近に感じられるよう努めます。

(2) 多様な伝統芸能を未来へつなぐ公演

伝統芸能の上演に最適な舞台・楽屋設備、最新の安全な舞台機構、快適な客席やホワイエを備えた新たな国立劇場は、大劇場・小劇場・演芸場の三劇場において、歌舞伎・文楽・日本舞踊・邦楽・雅楽・声明・民俗芸能・琉球芸能・大衆芸能など多ジャンルにわたる、良質な主催公演を企画、開催します。それによって、実演家やスタッフが技芸や技術を継承する機会を確保し、そのジャンルの最高峰の公演実施を目指すと同時に、新進実演家の技芸向上の機会である若手主体の公演やコンクール等も継続、拡充していきます。

一方、愛好者から伝統芸能に全く触れた経験のない人たちまで、多様な人々の伝統芸能へのアクセシビリティ向上を目指し、公演形態・内容の多様化を図り、伝統芸能への興味や関心を喚起して、鑑賞と出会いの場を提供します。

歌舞伎・文楽においては、作品そのものをより深く楽しめるように、起承転結を備えた通し狂言の上演を主としつつ、文楽では、有名作品の一部を並べて上演する見取り形式の公演も開催します。日本舞踊・邦楽・雅楽・声明・大衆芸能などのジャンルでは、多種多様なテーマ設定や公演内容により、古典作品の鑑賞機会の充実、技芸の継承も推進します。現地でしか見られない民俗芸能や琉球芸能についても、ふれあいと交流の広場からの情報発信や地域との連携などに努め、それぞれの芸能の伝承と普及に資する公演を着実に実施していきます。さらに、各ジャンルにおいて、廃絶した演目、演出の復活や新作の上演などによるレパートリーの拡充を心がけていきます。

初代国立劇場では、歌舞伎・文楽を中心に、その芸能の特徴やあらすじの分かりやすい解説を付けて有名作品を上演する鑑賞教室公演を実施し、好評を得てきました。次のステップとして、名作ではあっても鑑賞教室では取り上げない古典作品の世界へ、工夫を凝らした解説でご案内する入門公演の充実を図ります。日本舞踊・邦楽・雅楽・声明・大衆芸能などのジャンルにおいても、様々な角度から、より楽しめる入門公演を企画、実施し、観客層の拡充に努めます。

また、外国人の鑑賞の利便性を向上させるため、音声や字幕による多言語化を一層推進し、さらに、社会人や観光客などの来場しやすい時間帯の設定など、鑑賞機会の増加を図ります。多ジャンル・異ジャンルとの協働、新たな視点やテーマによる構成、先端技術を駆使した演出などによって、幅広い方面の人々の興味関心を惹きつけ、伝統芸能の新しい価値の創造に挑みます。

主催公演以外に、伝統芸能の実演家などの劇場施設利用により、多くの人々が舞台芸術に親しむ機会を増やし、実演家やスタッフが技芸や技術を受け継ぐ機会の拡充にも寄与します。あわせて、国立の劇場として公的式典などの利用にも供します。

(3) 舞台芸術の未来を担う多様な人材の育成

国立劇場では開場直後から、伝統芸能の伝承者養成事業を実施し、その後、国立劇場では現代舞台芸術の実演家の研修事業を行ってきました。

伝統芸能の分野では、研修修了者が現役の歌舞伎俳優の3割以上、歌舞伎音楽竹本演奏者の9割以上、文楽技芸員の5割以上、寄席囃子演奏者の9割以上を占めるなど、養成事業は伝統芸能の伝承において極めて重要な役割を果たしています。

現代舞台芸術の分野では、世界の優れた指導者や次代を担う若手芸術家が集い、高い技術と豊かな芸術性を備えたオペラ歌手・バレエダンサー・俳優等を輩出し、質の高い舞台づくりに貢献しています。

新たな国立劇場では、両分野の実演家の養成・研修を行っている強みを最大限に活かすため、伝統芸能の伝承者の養成所と現代舞台芸術の実演家等の研修所を一体的に設置します。両分野共通のカリキュラムなどを通して、講師や研修生が交流し相互に理解を深めることで、広い視野と教養を身につけた舞台人、日本の文化に根差しつつ世界的にも活躍できる人材を育成します。

また、社会に開かれた施設として、各地の文化施設や学校等と連携し、研修修了者等によるワークショップなどを実施することで、舞台芸術の普及はもとより、養成研修への理解や支援の広がり、そして志望者の増加を図ります。

さらに、舞台芸術を支える公演制作者や舞台技術者等の人材養成のため、大学・専門学校等のインターンの受入れ、全国の劇場・音楽堂等の職員を対象とした実地研修等の実施、伝統芸能舞台技術の普及のための仕組みづくりについて検討を進めるなど、国立の劇場としての使命を果たしていきます。

（４）伝統芸能の継承・発展を支える調査研究とデジタルアーカイブ化の推進

新たな国立劇場では、主催公演や伝統芸能全般について各種の調査研究と芸能資料の収集、デジタルアーカイブ化を推進し、その成果を公演や演技・演出の向上のために活用するとともに、より多くの人々が快適で便利に利用できるように、伝統芸能の情報発信機能を強化していきます。

昭和41年の開場以来、国立劇場・国立演芸場・国立能楽堂・国立文楽劇場に

において作成された公演記録資料は膨大な量が蓄積され、この半世紀の伝統芸能の姿をありのまま伝える唯一無二のコンテンツとなっています。これらの資料のデータベース化を推進するとともに、デジタルアーカイブを充実し、国内外を問わず、いつでも、どこでも、だれでもオンラインで閲覧・視聴できることを目指します。また、今後の公演形態の多様化や利用者のニーズの変化にも対応していきます。

歌舞伎・文楽等の主催公演に関する上演記録の調査、近代の歌舞伎等の興行や錦絵等の収蔵資料に関する調査研究などにあたっては、大学や研究機関等との連携をさらに強化し、最新の研究成果を取り入れ、その調査研究の成果についても電子書籍化・データベース化を行い、利便性を向上させます。また、現代における伝統芸能の受容状況、興行や鑑賞者の状況と変動等についての調査を行い、劇場運営等に関する企画戦略への活用を図ります。